

目的 整容を目的としたブラジャー、ガードル等の拘束被服によって人体に与えられる被服圧は、各部位でのサイズを含む体型補正効果や動作時における防振効果に有効である。しかし、過度の被服圧は着用感の低下はもとより人体生理上様々な問題を与える。

そこで、体型補正のための適正被服圧レベルを把握するために、モデル実験および人体実験より、被服圧と人体表面の圧縮硬さ変化との関係について検討を行う。

方法 モデル実験においては人体表面の圧縮硬さを考慮した3種類の受圧体モデルを使用し、圧縮子の面積、被覆する試料を変化させ、被服圧と受圧体モデルの圧縮変形量との関係を検討した。人体実験では、拘束力の異なるガードルおよびサポートストッキング各3種類を使用し、被服圧の違いによる大腿部の圧縮特性変化を検討した。なお、人体表面の圧縮特性および被服圧の測定は著者らによって開発した装置を使用した<sup>1) 2)</sup>。

結果 受圧体モデルを拘束する被服圧の増加に伴って圧縮変形量が減少する。減少量は、軟体モデルほど、また圧縮子の面積が大きいほど顕著であった。しかし、一定の被服圧レベルに達すると圧縮変形量もほとんど変化しないことが明かとなった。このことは人体実験においても同様であり、過度の拘束による人体への悪影響を示唆するものである。

引用文献 1) 伊藤紀子他；人体表面の圧縮特性に関する研究 織消誌, 26, 204-209(1985)

2) 伊藤紀子；被服圧計測のためのエアバック方式の使用性 家政誌, 44, 291-298(1993)